

# Revised POLESTAR Reading Course の目指す方向

西光 義弘

このたびの POLESTAR Reading Course の改訂から代表著者となりました西光です。この教科書が始まった最初から関わっていますからもう 15 年になります。旧課程の初版では、編集陣はとにかく興味深い読み物を探してくることに一生懸命でした。そのころはそれが最大の特色でしたが、旧課程の改訂版からは、題材のよさを追求すると同時に、Reading Skill を本格的に取り入れた形をとるようになりました。また、新課程に入ると教科書のカラー化に伴い写真やイラストなど色鮮やかなものとなっていきました。初版では『効果的な読み方を身につけ、それをさまざまな文章で実践する』という教科書を目指して材料を集め、アレンジし、作成しました。おかげさまで教育現場ではかなり受け入れていただけました。今回の改訂では、教育現場からいただいたさまざまな意見を踏まえ、Reading Skill の練習を今までに増して強化し、題材も、論理構成のしっかりしたものを増やしました。

今回の改訂においても従来の特色はさらに強化されています。

## ① リーディング・ストラテジーの全面的な採用

p.6「本書の構成・特色」に示したように Lesson 1 から 4 までの UNIT 1 を「Reading Skill 習得編」として、基本的な 4 つの Reading Skill を集中的に習得できるようにしています。続く UNIT 2, 3 は「Reading Skill 実践編」として、UNIT 1 で学んだ Reading Skill を中心に、さまざまな Skill を用いて読みの効果を上げる工夫をしています。(後ろ見返し「Reading Skill 一覧」をご覧ください。)

## ② 幅広い範囲にわたるさまざまな読み物

今回の改訂で入ったものの中でも Lesson 8 の Mattie Stepanek — Listen to Your “Heartsong” は涙なしには読めない感動の実話ですし、Lesson 4 の Bob Marley はレゲエ・ミュージックのキングとして知られている人物の実像に迫る読み物でありま

す。また、Lesson 9 では Stephen Hawking が科学文明のゆくえについて読み応えのある論を展開しており、Lesson 11 では明朝中国の航海家・鄭和(ていわ)の大航海についての大胆な仮説を紹介しています。

## この教科書を通して学んでほしいこと

私の現在の研究課題は文化心理学や対人関係の社会心理学で得られた知見を日本語と英語の談話分析に応用することです。私も共同研究をしたことのある日本語学者であった故 John Hinds 氏は英語は speaker/writer responsibility の言語であり、日本語は hearer/reader responsibility の言語であると指摘しています。つまり英語は話者および書き手がわかりやすくする責任を取る言語であり、日本語は聞き手および読み手が理解に努める責任があるという指摘です。具体的には実際の英語と日本語の談話を比べてみるとさまざまな差異が見出されます。英語ははっきりとものを言うのに対して日本語はほのめかすだけで終わることが多い。またいろいろなトピックを行ったり来たりする日本語に対してテーマにまとまりが強い英語といったことも観察されます。

論理的思考が強いかどうかについては、文化心理学において西洋人は矛盾に敏感であり、東洋人は鈍感であるという実験結果が出ています。日本人の英語学習者に必要なのは論理的思考を英文を読む中で身につけることです。 Reading Skill を実践することは論理的思考を育て、英語らしい思考過程を理解する助けになるでしょう。本教科書を用いて指導されることによって、日本語から見るといやに理が勝っている印象がある英語の文章の流れというものを生徒が少しでも生で味わうことができるものと信じているものであります。

(神戸大学大学院教授)